

人との出会いを大切に

6年生が、狂言学習で、山口耕道先生と出会う中で、多くのことを教えていただいています。それは、狂言のご指導から生き方についてまで、貴重なお話をしていただいています。貴重な機会に大変感謝しております。

人というのは、善きことばかりをするのではなく、「あの人はこんな人」「この人はこんな人」と性格付けをしたがる。私たちが「性格」と思っているのは、その人の表にちょっと出ているところ。人は、自分自身の善いところと嫌やなあと思うところの両方を持ち合わせている。善と悪どちらも、みんな自分の中に持っている。それが、時としてポコッと出てくるのである。



「怒る」「憐れむ」「愛する」・・・、あらゆる感情を持っているのが人である。その気持ちを、演ずる時に自分の中から探してくる。チャンスだと思って、自分の中から感情を探してくる。太郎冠者・次郎冠者にのせて。太郎冠者・次郎冠者等の言葉にのせて、思い切って発する。「恥ずかしい」「ちょっと隠す」は、ダメ。観ている人が気を遣う。観ている人（観客）に気を遣わせてはいけない。堂々と振る舞うこと。

一人一人が、自分に勝つために、変身するために、太郎冠者・次郎冠者・主人等の役をしながら、自分の経験として積み上げてほしい。

歴代の6年生には、今のような話をしてきた。その年その年の6年生の特徴があるが、変わらず大切なのはクラスのチームワークだ。



山口先生、熱心なご指導をどうもありがとうございます。

6年生のみなさん、2月の発表会に向けて、今年の6年生ならではの狂言をみんなで作っていきましょう。

《6年生の狂言学習の様子を紹介します》

【練習より】初めての動き付きの練習です。扇子も初めて使いました。

扇子の開き方、難しいなあ。



平荘狂言教室後援会『伝統文化研修会』より

平荘小学校の『狂言学習』は、本校の特色ある学校としての取り組みです。6年生になると、狂言学習をし、2月には大勢の前で『狂言学習発表会』を行うというのが恒例となっております。そして、この特色ある学校運営をサポートしてくださっているのが、山口耕道先生をはじめ、平之荘神社、平荘狂言教室後援会の皆様です。

12月11日（土）に、両荘公民館で、『能楽と郷土を知る会』の浅原広基さんを講師に、『伝統文化研修会』（平荘狂言教室後援会主催）が開催されました。テーマは、『郷土に生きる能楽の歴史』です。

ここでは、能と狂言についてお話を伺いました。以下、講演の一部を紹介します。

狂言は、庶民の生活の一部を切り取って見せているもので、笑いを重要な要素としているのが特徴です。狂言のセリフの中の「このあたりのものでござる」という言葉は、場所を決めずに、どこでも演じられるように、どこでもありそうな話として設定されています。また、役割も、太郎冠者・次郎冠者・三郎冠者・・・と、名前ではなく一人目・二人目・三人目・・・という表し方をしています。狂言の衣装においても、能の衣装が絹に対して、狂言の衣装は麻でできています。ストーリーについては、狂言は言葉（セリフ）が中心で、コミカルな喜劇が多く、庶民の日常が題材となっています。そのコミカルさを真面目に演じるころにおもしろさがあります。私たちの住んでいるこの地域（東播磨の地域）にも、昔、狂言で有名な方（4名の中の1人）がいました。「野口源太夫」（都染）と言います。

能楽は、日本の伝統芸能であり、能と狂言の総称で、室町時代から（約650年）現在まで絶えることなく演じ続けられています。2008年には、重要無形文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産（第一号登録）に登録されました。

狂言が、今も続いているのがポイントです。これからも、地域と一体となって続いてほしいと思います。

6年生のみなさん、上記のお話も、今頑張って練習をしている狂言の学習に役立ちますね。ぜひ参考にしてください。そして、昨年の6年生の心を受け継ぎ、次年度の6年生（今の5年生）につないでいけるよう、頑張ってほしいと思います。